

『孤独な果実』について

水 田 圭 子

『孤独な果実』は1985年に、ニュージーランド出身のジョン・リードが脚本を書き、監督した映画である。キャサリン・マンスフィールドの生涯を扱った作品であるが、通常の伝記映画とは違う特異なスタイルを持っている。マンスフィールドの熱心な読者や研究者は、波乱に富んだ彼女の生涯が、銀幕上に再現されることを期待して観るかも知れないが、物語が進むに従い、その期待は裏切られるだろう。けれども観終わって、この映画がマンスフィールドという稀代の芸術家の本質を、確かに表現していることに気づくはずである。つまり、ここで本当に語られているのは、マンスフィールドの実人生ではなく、彼女の作品世界の方なのである——と言っても、この映画が彼女の書いた作品自体を映像化しているという意味ではない。彼女が短編小説を書くために生み出した独創的な文章技法を、映像表現に移し変えている、という意味である。監督のジョン・リードは、敬愛する母国の世界的作家の生涯を描くにあたり、マンスフィールドの90余の短編小説をくまなく読み、彼女の残した相当量の日記や書簡にも目を通したはずである。そして、おそらく彼は、日記や書簡よりも、作品の方に彼女の真実の姿があることを確信したのである。それゆえ、作品を解釈し理解するために日記や書簡を利用するという普通の伝記作者の手順とは、全く逆の方法を彼は用いざるを得なかった。つまりマンスフィールドの手紙や日記を読み解く鍵を作品の方に求め、彼女の実人生が何よりも作品に込められていると信じる姿勢を貫くことにしたのである。その結果彼は、マンスフィールドの生涯をマン

スフィールド自身のスタイルを用いて描くに至ったのである——そこには無論、芸術作品に不可欠の虚構も含まれている。

マンスフィールドのスタイルとは、さりげない日常の断片に人生を凝縮することである。一瞬の現在に永遠の過去と未来を包括させ、一個の石や一滴の雨粒にさまざまな人間の幸福や不幸を映し出すことである。だからこの映画には、とりたててストーリーもドラマもない。マンスフィールドの短編小説の筋を語るのが無意味であり、不可能であるように、この映画の筋を語ることは難しい。無論、マンスフィールドの生涯にドラマがなかったと言うわけではなく、むしろ、彼女の生涯は大変に劇的なものだった。まだ英国の植民地だった時代のニュージーランドに生まれ、20歳の頃に単身英国に渡って、幾人もの男性との出会いと別れを繰り返し、病魔と戦いながら大陸諸国を転々としたあげく、34歳の若さでフランスに客死したのだから。そのうえ彼女は、自らの体験を題材にすることが非常に多い作家だった。にもかかわらず、彼女はドラマを直接、作品で語ることはなかった。ドラマが人生の基盤ではない、という認識から彼女の文学は出発していた。大げさな人生の事件や激しい変転は、例えば、自分がカフェの片隅に腰をおろしている時、テーブルに置かれた紅茶から立ち昇るゆげの中にふと現れては、ゆらめき消えて行くような一種の幻影に過ぎない。だから彼女のペンは、向かいの席で窓越しにじっと通りを眺めている老婆の横顔や、時折耳元へ届いてくる見知らぬ客人たちのとぎれとぎれの話し声のほうを、丹念に描写する——そのように静止した細部こそが、大きなドラマを含む人生のすべてを支えていると信じて。この『孤独の果実』と題された映画も同じ文体を持っていて、主人公たるマンスフィールドの姿は結局、夫のジョン・ミドルトン・マリの回想の中にしか登場しない。けれども、記憶の中でこそ人は本当に生き続けるというのが、最愛の弟を事故で失って、生きていた時以上に身近に感じ、幼い日を過ごしたニュージーランドについて書こうと決

意して以後の、マンスフィールド自身の信念だった。そして実際、ベッドの中で激しく咳こんだり、安ホテルの一室で鏡を見つめて無理に笑顔を作ろうとしたりする、きれぎれのわずかな映像は、どんな長大なドラマを繰り広げるよりも、孤独という彼女の本質を見事に物語っている。

マンスフィールドとミドルトン・マリの関係は、大変重要なテーマのように思えるが、これまで充分に研究されてきたとは必ずしも言えない。その意味で、『孤独の果実』がこの二人の関係にテーマを絞っているのは興味深いことである。繊細で詩的な直感力に恵まれた作家と、ロマン主義的傾向を持つ卓抜な批評家にして才気あふれる編集者というこの男女の組み合わせが、互いの文学活動に計り知れない影響を与えあったことは疑いない。二人がどれほど互いを必要としたかは、今に残されている二人の膨大な書簡集を読めば明かである。にもかかわらず、この夫妻の関係は、例えば、彼らと親交のあったD・H・ロレンスとフリーダが示したような熱烈な関係とは非常に違っていた。それはある意味で、この傾向の異なる2人の作家がそれぞれ抱いていた文学的なテーマの違いそのままであり、ロレンスが、男女の真の愛情関係とはどのようなものかを追い求めたとすれば、マンスフィールドは、どのような愛情関係を持つとうともついに孤独を逃れることのできない人間の姿を描いた。だから、この映画に映し出されるマリの回想の中のマンスフィールドは常に孤独である。そして、彼女は今も自分の中で生きている、と繰り返し語るマリの姿もやはり孤独である。互いの孤独を深めあうことが、この夫妻にとって最大の務めだったとは……。それでも、度重なる別居を他人にとがめられて、彼女を好きにしてやったのだ、自由にしてやったのだ、と弁解するマリの言葉には悔恨の響きがある。彼はマンスフィールドのことを回想しても慰めが得られる訳ではない。むしろ悪夢にうなされるような思いをするばかりである。彼がマンスフィールドの死後、彼女の未完成の遺稿を始め日記や書簡や雑記録の類まで次々と公刊したのは、

その悪夢から逃れるためのようにも見える。この映画の冒頭には、マリがフランスへ渡ったついでにマンスフィールドの墓へ立ち寄るシーンがあるのだが(彼女の墓はフォンテヌブローのアヴォンにある)、彼はバラの花束を用意しながら、墓前に供えるのをやめて持ち帰ってしまう。最愛の妻の死を確認できずにいる——確認することを恐れている、同時に、確認することが許されずにいる孤独な夫の姿が、この場面では行き場を失った赤いバラの花束によって、鮮やかに示されていた。

映画の邦題『孤独な果実』は、原題 *LEAVE ALL FAIR* の訳ではなく、原題とは全く別の視点から新たに発想されたタイトルのようなのだが、映画に登場するマンスフィールドの孤独な姿をよく表現している。原題の方は、マリに宛てたマンスフィールドの書簡の一節からとられたものである。これは彼女の死の半年前に、療養のため滞在したスイスで綴られた手紙だが、内容的には形見分けの指示が大部分を占める一種の遺書であり、映画の後半で重要な役割を持つことになる。

... All my manuscripts I leave entirely to you to do what you like with. Go through them one day, dear love, and destroy all you do not use. Please destroy all letters you do not wish to keep & all papers. You know my love of tidiness. Have a clean sweep, Bogey, and leave all fair ——will you? ...¹⁾

(・・・私の原稿はすべてあなたにおまかせしますので、お好きになさってください。お暇なときに読んで、不要なものは破棄してください。手紙や、その他、私の書いたもので要らないと思うものは全部捨ててくださいるかまいません。私がきれい好きなのはご存知ですよね。さっぱりとあとかたづけをしてくださいますか。・・・)

ニュージーランドのターンブルライブラリーに現存するこの書簡には1922年8月7日の日付があるが、投函されなかったようである。²⁾そして一週間後の8月14日に、彼女はこの書簡とは別に、正式な遺書をしたためた。

All manuscripts note books papers letters I leave to John M. Murry likewise I should like him to publish as little as possible and to tear up and burn as much as possible. He will understand that I desire to leave as few traces of my camping ground as possible.

(原稿やノートや手紙はすべて、ジョン・M・マリに託します。出版は最小限にして、できるだけ破棄、焼却するよう望みます。立つ鳥跡を濁さずの思いを、彼なら理解してくれると思います。)³⁾

これら二種類の文面に記されたマリに対する希望には、微妙だが看過できない差異がある。これは一週間の間に心境の変化があったと見るべきか、それとも個人的な書簡と公的な文書で、表現上の違いが出たと解釈すべきか、判断はつけかねるが、いずれにしても‘leave all fair’という彼女の基本的な気持ちに変わりはない。映画の中では、遺書の方を中心に据えたうえで、マンスフィールドの日記や書簡を公刊しながら彼女について、悲劇のヒロイン的なイメージを創り上げ——商業的にも成功して一財産作った——マリを、思いやりの無い俗物とする視点が用意されている。無論、マリにしてみれば、自分は、彼女の日記や書簡という遺産を活用して、生前以上に彼女を有名にした有能な編集者であり、愛情深い夫である。彼女は(幸福な妻になるよりも)大作家になるのが希望だったのだと、映画の中のマリは幾度もくりかえす。どちらがfairな見

方かと、この映画は問いかけている。

映画でマリを演じているのはイギリスの俳優、ジョン・ギールグッドで、舞台の方が本業らしく、日本ではあまりなじみがないかも知れない。今日残されているマリの晩年の肖像写真は、瘦身のいかにも神経質そうなインテリという面立ちで、ギールグッドの好好爺とした風情はすこしいメージが異なるようにも思うが、その落ち着いたいふし銀のような演技は魅力的である。映画は、晩年のマリが、マンسفールドの日記や書簡をフランスで出版するために、フランスの出版業者、アンドレを訪れる場面から始まる。アンドレにはマリー・テイラーという恋人がいて、マリが、偶然にもニュージーランド生まれのこの女性に、若き日のマンسفールドの面影を見いだすところから、物語が展開する。マリー・テイラーを演ずるのは歌手としても有名なジェーン・バーキンで、少し前歯の出た顔立ちが美人というより個性的という形容がふさわしいが、男性に振り回されることを潔しとしない勝ち気で自立心の強い女性を演ずるには、まさに適役である。マリの回想に現れるマンسفールドを演ずるのが、同じくジェーン・バーキンである。回想シーン独特の、薄明を思わせる冷え冷えとした蒼色の映像の中で、マンسفールドの特徴的なショート・カットのヘアスタイルを忠実に真似て、実際のマンسفールドの写真と生き写しのような表情を見せながら、マリー・テイラーとの二役という難しい役どころをたいへんうまくこなしている。結末では恋人と別れてニュージーランドへ帰るという、いわばマンسفールドが実現できなかったもう一つの生き方を選ぶことになる、このマリー・テイラーという女性が、実在したのかどうか、映画の虚構に過ぎないのか、現在の資料ではわからない。F・A・リーの著したマリの伝記にも、このような女性の名は見当たらない。けれども、この映画特有の光と影、現在と過去、虚構と事実の交錯の中で、マリー・テイラーという女性が、現実のマンسفールドの姿を浮き彫りにするために不可

欠な存在であるのは確かである。

この映画は、マンスフィールドが息を引き取り埋葬されたフランスを舞台にし、実際にフランスで撮影されたものだが、映像はフランス的な色彩感よりも、イギリス的な陰影を重視した表現となっている。作品としてはニュージーランドの映画ということになるのだが、やはりイギリスの伝統が基盤にあるのだろうか。自然光を最大限に活かした奥行きのある映像処理は気品があって、情感豊かである。音楽はステファン・マッカーティの担当と記されているが、モーツァルトの室内楽を彷彿とさせる優雅で端正な曲の数々は、現代に創られたオリジナルとは信じ難いほどクラシカルな響きを持っている。もっとも、こうした秀逸なカメラワークや伴奏音楽が、決して押しつけがましくなく、きわめて控え目に用いられていることが、作品の質を一層高めている。ある時は、真つ暗な画面に、マリー・ティラーがベッドの中で吸うシガレットの赤い火の点だけが映しだされている。またある時は、マンスフィールドの思い出にふけるマリを映しだすシーンで、バックに時計の、時を刻む音だけが聞こえている。このようにたいへん詩的な表現技法を、マンスフィールド自身が生きていて、もしも映画の制作にたずさわったら実際に使ったかも知れないと、ふと感じたりする。

この『孤独な果実』は前述したように、ニュージーランドの映画であり、日本では1986年11月にニュージーランドシネマ・ウィークというイベントが行われた際、出品された一篇である。このイベントは、開発途上にあって世界的にもあまり知られていないニュージーランド映画を我国に紹介して、その水準の高さと文化的特性を知ってもらおうという意図で開催されたものだった。『孤独の果実』は現在ビデオで発売されているが、このような佳品が、一般に上映される機会がないのは残念なことである。

注

- 1) Alexander Turnbull Library, MS Papers 4000:40.
- 2) Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (Oxford: Oxford University Press, 1982), p.365.
F.A.Lea, *John Middleton Murry* (London: Methuen, 1959), p.95.
- 3) Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (Oxford: Oxford University Press, 1982), p.366.